

# アイルランドのラウンドタワー — 石積み技術の発達と年代 —

新 納 泉

## 要旨

アイルランドのラウンドタワーの編年においては、これまで入り口部分の形態の変化が主要な指標とされ、なかでも「ロマネスク式」という特徴的な様式の入りが重要な年代の基準となっていた。しかし、典型的な「ロマネスク式」の入り口をもつ例は、入り口と壁体との噛み合わせが悪く、後世の補修の際に新たに作りかえられたものである可能性が大きいと考えられる。そのような問題のある「ロマネスク式」の入りを除外すると、壁体の石積み技術の発達と入り口部分の形態の変化は整合的で、矛盾のない編年を構築することができる。それによると、アイルランドのラウンドタワーは東海岸部の北半からその他の地域に広がっており、バイキングなどの北からの襲撃・略奪への対応が全土へ波及する状況を示していると考えられる。

## はじめに

アイルランドの景観のなかで最もきわだつ建造物は、ラウンドタワーではないだろうか。町や村の教会の一隅に、天をつくようにそびえ立つ先端の尖った細い円塔は、遠くからその存在を視認することができ、最高のランドマークの役割を果たしてきた(図1)。十字架に円環が組み合わされた石造のハイクロスとともに、アイルランドの個性を存分に示す野外の造形物として、不動の地位を築いてきたのである。

しかし、それほど広く知られている建造物ではあるが、意外にラウンドタワーについての研究は進んでおらず、正確な実測図すらほとんど作成されていないというのが実情である。本格的な学術研究の対象として取り上げられることは少なく、どちらかというとアマチュア研究者の関心の対象である状態が続いていたが、ようやく近年になって専門的な学術書が刊行されるようになった。しかし、筆者は、いくつかのラウンドタワーを実見するなかで、それでもまだ研究が十分に深められていないことを痛感し、限られた時間と不十分な観察によるものではあるが、現状での見解をまとめておきたいと考えた。重要な遺跡はできる限り実見しようと努めたが、それでもいくつかの鍵となる遺跡が未見のまま残されており、しかも年代の検討に不可欠な役割を果たす入り口部分についても、至近距離から観察できた例は少ない。さらに、筆者のような立場では、内部を観察できるケースはほぼ皆無であるという問題をかかえている。それでも、アイルランドにおいてこの時代の考古学を専門とする研究者に筆者の意見を伝え、好

意的な感想を得ることができた。そうしたことをふまえ、やはり現状で活字化しておくことは有効であると考え、あえて公表に踏み切った次第である。不十分な点が多々あると思われるが、ご容赦をお願いしたい。

## 1. ラウンドタワーの概要

ラウンドタワーは、高さが30 mにも達する石積みの円塔で、基底部の直径は5～6 m程度という著しく細長いものである。大多数の例は平面形が真円であり、上方に向かうにしたがって径が小さくなり先端は尖塔となることが多い。自然石や切り石の間に漆喰をつめてつくられているが、後にもふれるようにあまり頑丈な基礎工事はおこなわれておらず、日本に住む者からすれば、倒壊しないことがむしろ不思議なくらいであるが、アイルランドでは地震はほぼ皆無であり、その心配はそれほど大きくはないのであろう。それでも、落雷や突風などで崩壊した例は少なくないようである。

かつては、アイルランド全土に90ほどのラウンドタワーがあったといわれるが、残存するのは64基で、そのうちの15基は基礎などを残すのみであるという (O'Keeffe 2004)。ラウンドタワーを表すアイルランド語は*Cloigtheach*で、クログハッホと発音し、ベル・タワーという意味である。しかし、鐘が吊り下げられていたのではなく、ハンドベルで鐘が鳴らされたようである。バイキングをはじめとする外敵の襲撃に対しては、警鐘を鳴らすだけでなく、聖典や修道院の宝物を守る収蔵庫の役割も果たしており、修道士・巡礼者のための標象という機能ももっていたと考えられている (Edwards 1990 : 127, 128)。実際に、バイキングだけでなく、ア

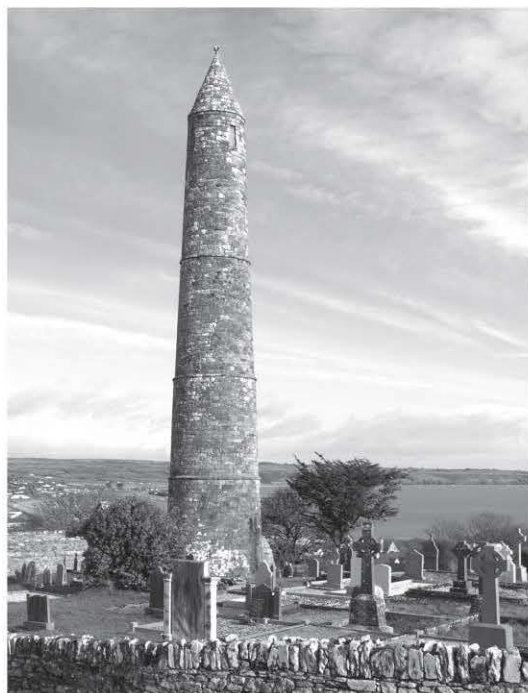


図1 アードモアのラウンドタワー

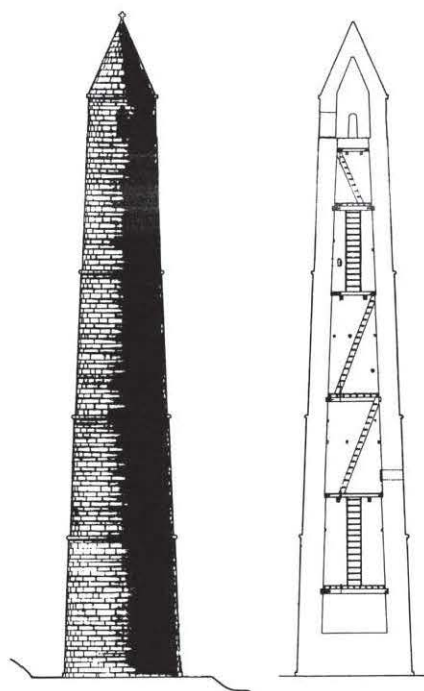


図2 ラウンドタワー模式図



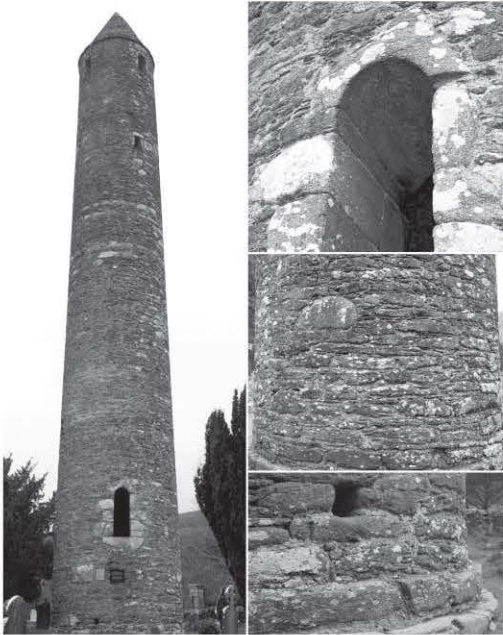


図3 グレンダーロッホのラウンドタワー

アイルランドの内地に住む外敵から襲撃・略奪を受けた事例は、文献に数多く記されている。

代表的なラウンドタワーのひとつに、グレンダーロッホの例がある (McClafferty 2012)。グレンダーロッホはダブリンの南約40kmにあたり、「アイルランドの庭園」といわれるウィックローの山なみのなかにいだかれた溪谷に位置している。グレンダーロッホ (Glenn dá Loch) とは「二つの湖の谷」という意味で、氷河によって形成されたU字谷の川筋に残っている二つの湖のほりにつくられた初期の修道院の遺跡である。6世紀後半に聖ケビンによって開かれ、10世紀から12世紀ごろを頂点に、当時のアイルランドを代表する修道院に発達していった。

グレンダーロッホのラウンドタワーは、地表からの高さが約30mで、完存している例のなかでは、平均的かやや高いほうといえるかもしれない (図3)。円錐形の頂部は持ち送りで石が積み上げられており、さらに先端には円錐形の石をのせているという。17世紀に落雷で円錐形に積み上げられた先端の部分が崩れ落ちたが、1876年に落ち込んだ部材を用いて頂部が再建されており、おおむね元の状態をとどめていると考えてよいようである。基礎の部分は、発掘調査の結果、地下1mほどで基盤である砂礫層が確認されており、そこから石材が積み上げられていて、特別な基礎構造は認められなかったという。ほかにも何例かラウンドタワーの基礎部分が発掘されているが、頑丈な基礎構造はほとんど確認されていない (O'Sullivan et al 2008: 141-3)。これだけの高さや重量のある建造物が、それほど強固な基礎構造なしに建造されているというのは驚きと言わざるをえない。ちなみに、壁体の内部にはかなり不揃いな石が用いられており、すべての石がかみ合って重量を支えているというわけでもないようである (図4)。

ラウンドタワーの規模は、地表付近で、外径4.9m、内径2.7mあり、壁の厚さは1.1mである。壁には、雲母片岩の板石と、ところどころに花崗岩の自然石が用いられており、石の間には漆喰が充填されている。アイルランドは大半が石灰岩地帯であるが、このラウンドタワーのあるウィックロー近辺は花崗岩を産出する。雲母片岩も近くで産出するので、石材は基本的に地元のものを用いているようである。

入り口は地表からの高さ3.5mの位置を下面としており、南東の大聖堂の方向を向いている。入り口が高いのは、梯子を用いて出入りするためであり、襲撃を受けた際には梯子をはずして入り口を封鎖して中にたてこもることになる。入り口の周囲の石はほとんどが花崗岩で、上部はひとつの石をアーチ形に刳り込んでいる。入り口の部分の壁の厚みは1m余りで、それをほ

とんど一石でつくっており、花崗岩を整  
美な切り石に加工する技術が発達してい  
たことをよく示している。内部には、壁  
からわたされた梁によって6層の床面が  
つくられ、地表面を含めると7階の構造  
で、上下の移動も梯子を用いていた。最  
下層は窓がないが、入り口より上の4層  
には小さな窓があり、最上層にはやや大  
きな窓がほぼ方位にしたがって四方向に  
開いている。



図4 ラウンドタワーの基底部構造

## 2. 従来の研究の流れ

アイルランドのラウンドタワーについて、はじめて一定のまとまった記述がおこなわれたのは、19世紀中頃のことである (Petrie 1845)。それ以後、詳細な検討がおこなわれることはほとんどなかったが、1979年になって、バローによる『アイルランドのラウンドタワー——研究と一覽——』が刊行され、それぞれのラウンドタワーの計測値や、スケッチ、および写真などが公表されることになった (Barrow 1979)。バローは、アマチュアの研究者であるが、たいへんな労力を投じて一覽をまとめており、そうした作業については高く評価する声がある一方で、6世紀ないし7世紀にラウンドタワーが出現したという考え方に対しては、中世考古学研究者からは「それを支持する根拠は皆無である」という指摘があり (Edwards 1990 : 128)、年代を記した章については、読むに値しないというような厳しい評価を与えられている (O'Keeffe 2004)。

1999年になると、同じくアマチュアであるが、建築学関係の出身であるレイラーによって、『アイルランドのラウンドタワー——起源と建築の検討——』が刊行され、入り口の構造の検討にもとづいて、16の型式分類がおこなわれた (Lalor 1999、図5)。レイラーは、この分類について、「16のステージ」という表現を用いており、おおむねこれが年代的順番を表わしていると考えたようである。配列の根拠については詳細な記載がないが、1～4は入り口の上部に横に渡した平たい石を用いており、5～9は上部の石にアーチ状の刳り込みが入り、10～12は上部中央に楔形の石を用いてアーチ状とし、13～16は多数の石を用いることによってアーチ状を形づくるといふものである。

同じころに刊行されたステイリーの『アイルランドのラウンドタワー』という概説書では、ラウンドタワーの年代について、文献の記載から、950年ごろにスレイン地域のラウンドタワーが火災にあったと記されていることや、1238年にゴールウェイでラウンドタワーの建設がなされたという記述があることから、10世紀前半に出現し13世紀前半に終わるという年代観が示されている (Stalley 2000 : 6, 7)。さらに、石積みの技術の発達は、場合によっては編年の手がかりとなることもあるが、自然石を用いた例が必ずしも古くなるとは限らず、クロンマクノイ



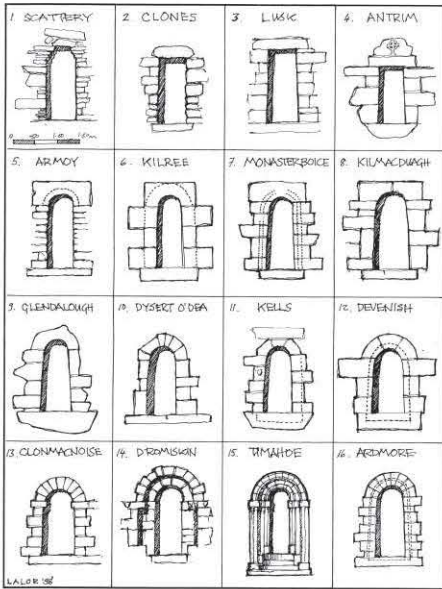


図5 レイラーによる入り口の分類

ズやドラムレインの例では、下部が切り石でありながら、上方にははるかに粗雑な石が用いられていると論じている。

以上のような研究を受けて、ダブリン大学 (UCD) で中世建築の考古学を専門とするオキーフェが2004年に『アイルランドのラウンドタワー——初期アイルランド教会の建築・祭祀・景観——』を著し、ラウンドタワーに関する総括的な検討をおこなっている (O'Keeffe 2004)。オキーフェは、レイラーの入り口部分による編年を継承しながら、(1)上部に横石 (リンテル) をわたすもの、(2)同じく横石をわたすものであるが、上の角が特徴的に直角となるもの、(3)入り口の上部がアーチ状を呈し、持ち送りあるいは一石を刳り込むもの、(4)上部がアーチ状で中央に楔形の石を用いるもの、

(5)入り口のまわりにやや浮き上がった平坦な装飾をもつもの、(6)ゲール・アイルランド的ロマネスク装飾をもつもの、という6グループに分類をおこなっている (O'Keeffe 2004: 52～56)。そのうえで、教会建築の発達過程において、1050年と1130年に画期があり、「ロマネスク式」の初期の建造物であるロックオブカッシェルのコルマック礼拝堂 (図10) が1127～1130の建築であることから、(6)は1130年以降となり、1050～1130に(3)～(6)が含まれると考えている。ただし、1050年という年代は便宜的なものであって、確たる根拠は存在していないということである。また、(4)に属するとされるクロンマクノイズのオルーケのラウンドタワーは、文献から1124年の構築であると指摘されている。ただし、このラウンドタワーの入り口は、上部がアーチ状で中央に楔形の石を用いるのではなく、アーチ状に楔形の石を組み合わせる「ロマネスク式」に近いものである。なお、オキーフェが(6)の「ロマネスク式」のグループに含めているものは6例あるが、そのうちで典型的な「ロマネスク式」に属するものは、キルデア、ティマホー、ドロミススキンの3例のみである。ラウンドタワーの出現年代については、クロンダーキンのラウンドタワーが860年以降1076年以前の構築であるとし、1076年に近い時期に構築されたものと考えたいとしている (O'Keeffe 2004: 91)。しかし、これには難しい問題があると自認しているようである。

オキーフェの編年には、(5)の浮き彫り状の装飾が(3)の例のなかにも存在することや、(6)の「ロマネスク式」の例のなかにも典型的な「ロマネスク式」とは異なるものが含まれるなど、分類にやや問題があることと、ラウンドタワーの年代を新しくみようとする意図が過度に働いているように感じられることなど、いくつかの問題点が存在しているように感じられる。また、入り口は、襲撃を受けた際に最も破壊をこうむりやすい部分であり、実際に著しく異なった石材で補修されている例もいくつか認められるので、十分な注意が必要である。以下、その点を考慮に入れ、

石積みの技術の発達と入り口の構造の変化の両者を指標とする編年の構築を試みてみたい。

### 3. 石積み技術を重視した編年

以上のように、これまでのラウンドタワーの編年においては、入り口の形態の変化が重視されており、石積み技術の発達については、必ずしも安定した手がかりとはならないという姿勢が目立っていた。たしかに、教会建築をみると、新しい段階にも自然石を積んだ壁を用いる例が存在しており、石積み技術の発達が一直線的に進むわけではないというのが、むしろ常識的な理解であったように思われる。また、ラウンドタワーのなかには、下部に切り石が用いられている一方で、上方に自然石が用いられる例もあり、すべてが自然石から切り石へと進むわけではないことが注意されてきた。その他、入り口の構造の変化についても、オキーフェはそうした分類を行いながら、それに依拠するのは、「進化論的」であると考え、型式学的発達を重視する姿勢に対して著しく抑制的となっている。石積み技術の発達を安易にメルクマールとするべきではないという考え方も、そうした理解と関係しているようである。

しかし、下部に切り石が用いられ上方に自然石が認められるような例は、上方の部分がオリジナルなものであるというよりも、ラウンドタワーの構築がすでに終わった時代になされた修復によるものである可能性が少なくないようである。石材が異なれば石積みの方法も異なるかもしれないという点は確かに重要であると思われるが、はじめからそれを前提とするよりも、石積み技術の発達を基準とした編年を組み上げたい。石材の違いによる問題点などを洗い出すという手順を取るほうがよいのではないだろうか。そのような観点から、ここでは次の4つの変化を手がかりに石積み技術の発達について整理してみたい。

- (1) 壁に用いられる石材が自然石から精緻な切り石に変化する。
- (2) 石材の大きさが不揃いなものから均一な横長のものに変化する。
- (3) 横方向の目地が、単なる作業工程的なものから、正確に水平に通るものに変化する。
- (4) 石と石との隙間が減少し、ほとんど密着したものへと変化する。

この4つの要素は、多様な形や大きさの自然石から均一な切り石へという、ひとつの方向の変化のさまざまな現れ方であるが、必ずしも4つの変化が足並みを揃えているわけではないかもしれない。しかし、ひとまず最大公約数的な変化を、図6のように上から下への6つの段階に整理してみたいと思う。段階といっても截然と分かれるものではないので、あくまでも変化の目安という程度に考えておきたい。なお、ラウンドタワーの正確な実測図は作成されていないので、写真によって比較するが、写真の縮尺については、十分に統一できているわけではない。

第1段階は、カウンティー・アントリムのアントリムと、ダブリンのクロンダーキンを指標としている。石材は自然石をほぼそのままの形で積み上げており、目地はほとんど通っていない。やや大きめの石の間に小さな石を混ぜて積み上げるのがこの段階の特色である。第2段階は、カウンティー・ラウズのモナスターボイスと、グレンダーロッホを指標とするもので、やはり自然石を主体としている。ところどころに大きめの石を混ぜているが、比較的薄手の板石を多用しており、あまり不揃いな小石は含まれていない。グレンダーロッホの石材は雲母片岩



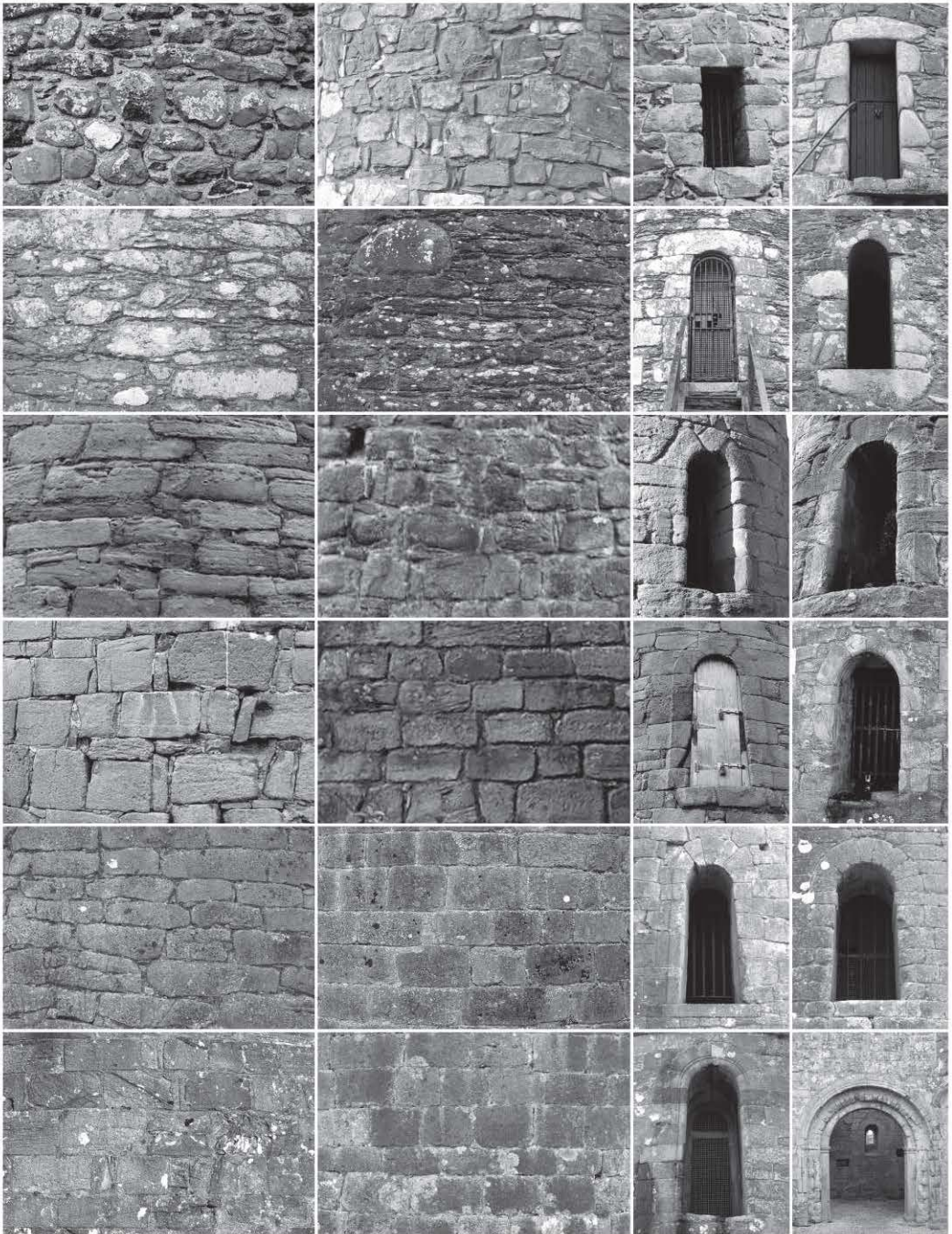


図6 ラウンドタワーの石積みと入り口の変化

アントリム クロンダーキン  
 モナスターボイス グレンダーロツホ  
 ロスクラ アーヴィラー  
 ラトゥー バラ  
 カッセル クロンマクノイズ (A)  
 アードモア クロンマクノイズ (B)

Antrim, Clondalkin  
 Monasterboice, Glendalough  
 Roscrea, Aghaviller  
 Rattoo, Balla  
 Cashel, Clonmacnoise (A)  
 Ardmore, Clonmacnoise (B)

であり、石材の種類が板石の形に影響を与えている可能性はあるかもしれない。目地は、板石を利用しているために少し通っているようにも見えるが、作業工程的な域を出るものではないであろう。第3段階は、カウンティー・ティッペラリーのロスクレとカウンティー・キルケニーのアビラーを指標とするもので、石材の大きさは不揃いであるが、一部で石材の加工が行われ始めているようであり、目地も多少ははっきりしてきている。この段階でも、石材の大きさには多少の違いが認められる。第4段階は、カウンティー・ケリーのラトゥーとカウンティー・メイヨーのバラを指標としており、石材の表面が比較的平滑となり、目地もかなり通っているものである。ラトゥーの例は、やや小型の石を間に挟んでいるが、そうした手法が用いられる最後のものである。第5段階は、カウンティー・ティッペラリーのカッシュェルと、カウンティー・オファリーのクロンマクノイズにある2基のラウンドタワーのうちの、オルーケのタワーと呼ばれているもの(クロンマクノイズ(A))を指標としている。石材の表面が著しく平滑となり、目地もよく通って、すき間がかなり少なくなっているものである。第6段階は、カウンティー・ウォーターフォードのアードモアと、クロンマクノイズのテンプル・フィニンのラウンドタワー(クロンマクノイズ(B))である。後者はもはや独立したラウンドタワーではなく、「ロマネスク式」の建物と結合した形で構築されている。石材の表面は著しく平滑で、目地の隙間もほとんどなくなっており、切り石の技術におけるひとつの到達点といえることができるであろう。

図6の右には、壁に対応させる形で同じラウンドタワーの入り口を示している。入り口の上部の形態は、一枚石を横にわたすものから、一石を用いてアーチ形の削り込みを施すものになり、そして中央上部に楔形の石を配して三石でアーチを表現するものを経て、アーチの石材の数が増え、最後に楔形の同じ形をした多数の石を配してアーチ形とするものに変化している。また、入り口の周囲を浮き彫り状に加工し、装飾を強める方向での変化が認められる。

第1段階の入り口は、正面から見ると長方形を呈しており、上方があまり狭くなるということがない。上部には「まぐさ石」(リントル)が用いられており、周囲に浮き彫り状の装飾はない。アントリムのリントルのさらに上の石には、ハイクロス状の彫刻が施されている。第2段階の入り口は、上部に一石をわたしてアーチ形の削りこみを施している。なお、モナスターボイスのものは、入り口の周囲を縁取るように1cmほどの段差で凹凸を彫っており、そうした装飾の最古の例のひとつになるものと思われる。第3段階の入り口は、上部の中央に三角形ないし台形に近い石をひとつ用いてアーチ形をつくるもので、3つの石でアーチを構成している。入り口の周囲ははっきりと浮き上がらせる装飾を施している。第4段階の入り口は、第3段階と似ているが、バラの例は4石でアーチを構成するところが異なっている。第5段階は、比較的多くの石でアーチを構成しており、カッシュェルの例は7石、クロンマクノイズ(A)は9石を用いている。第6段階の入り口は、多くの石を用いたアーチがいっそう精緻なものとなっており、アードモアの例では入り口の周りの角が丸められ、周囲の浮き彫りもさらに装飾的となっている。クロンマクノイズ(B)は、単独のラウンドタワーではないため独自の入り口をもっており、付設の建物の入り口を参考のために掲載した。

以上のように整理してみると、すべての資料がこの6段階のいずれかに疑問の余地なくおさ



まるというものではないが、石積み技術の発達と入り口の形態の変化は、次に述べる「ロマネスク式」の例を除くと、ほぼ矛盾なく対応していると考えてよいと思われる。なお、第6段階にあたるアードモアのラウンドタワーは、図1にみられるように、壁の途中に「ストリング・コース」と呼ばれる、多少突出した部分をめぐらせている。これは、ロックオブカッセルのコルマック礼拝堂にみられるような、「ロマネスク式」の建築の特色である。

#### 4. 「ロマネスク式」の問題と暦年代の手がかり

オキーフェは、「ロマネスク式」の入り口をもつラウンドタワーが1130年以降に構築されたと考え、それを重要な年代の手がかりとし、全体としてラウンドタワーの年代を新しくみる方向で議論をおこなった。しかし、先にも記したように、「ロマネスク式」を含む(6)のグループのなかに、典型的な「ロマネスク式」と考えられる資料は、キルデアと、ティマホー、ドロミスキンの3例が認められるのみである。筆者は、キルデアのラウンドタワーを実見することはできなかったが、いずれの資料も入り口部分と壁体とのかみ合わせが良好でなく、後の段階で入り口部分を全面的につくり替えたものではないかという疑いを強くもっている。

入り口と壁体とが完全に同じ石材でつくられている資料は、両者のかみ合わせが非常に良好である。入り口の部分は空間ができることから荷重が不均等にかかる恐れがあることと、襲撃を受けた際には最も破壊を受ける危険性が大きいために、入り口と壁体の石材のかみ合わせには特に大きな配慮がなされているように思われる。壁体は、横長の石材を用いる場合に、縦の合わせ目が上下で必ずずれるように配置されており、しかも一段おきに同じ位置に合わせ目がくるということも避けており、巧みに合わせ目をずらせていることが多い。一段おきに同じ位置に合わせ目がくると、その位置に縦の亀裂が入り、崩壊の危険性が高まるからである。そのために、入り口の左右の壁に用いられる石も、幅を意図的に変えて用いられている。

ところが、ドロミスキンの例(図7)をみると、入り口と壁体のかみ合わせが良好でなく、入り口の側面の石材が壁体の荷重を十分に受け止めている部分が認めにくい。また、入り口に接する部分の壁体の板状の石材も、必ずしもていねいに水平に積まれているとは思えない部分が

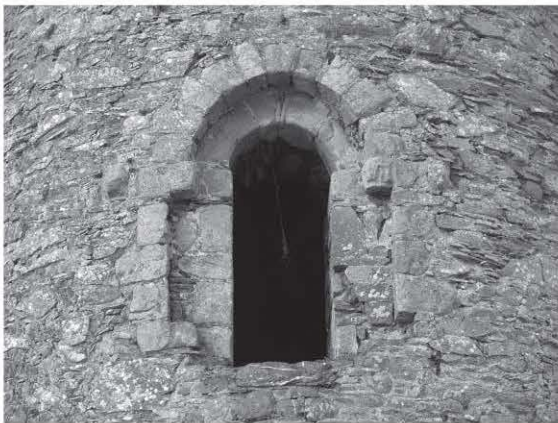


図7 ラウンドタワーの入り口(ドロミスキン)

あり、間隙に板状の石材を詰めたのではないかとと思われるところもある。さらに、入り口の基底面そのものが水平ではなく、向かって右側の入り口の側壁は左よりも高い位置から積み始められている。以上のような理由から、ドロミスキンのラウンドタワーは、壁体に用いられている石材が比較的古い段階の積み方であるため、構築よりもかなり新しい段階で修築されたものであると考えられる。ドロミスキンの修道

院は、908年にアイルランド人の襲撃を受け、978年にはデーン人に襲撃され、さらに1043年にもアイルランド人の襲撃を受けて一度廃絶したということである。どの段階からラウンドタワーが存在していたのかは明らかでないが、いずれかの段階に入口が徹底した破壊を受け、廃絶を経て再興された段階で入口が修復されたものと考えられる。

ティマホーの例(図8)も、入口と壁体のかみ合わせは良好ではない。さらに入口の下方には補修を思わせる部分も存在している。しかし、ティマホーのラウンドタワーは、壁体に用いられている石材が全体に著しく不均質で、随所に補修を受けたと思われる部分が存在しており、地面からの観察では十分な結論を導くことはできない。



図8 ラウンドタワーの入口(ティマホー)

い。第3のキルデアの例も、公開されている写真を観察する限りでは、入口の周辺に用いられている壁体の石材が他と異なっているように見えることや、アーチの上部にラウンドタワーでは他に例のない三角形の装飾が用いられていることなど、全体に非常に不自然な部分が多いように感じられる。

以上のように、典型的な「ロマネスク式」の入口をもつラウンドタワーは、いずれも入口と壁体との関係が良好ではなく、後世の補修の可能性が非常に高いように思われる。そうした点から、「ロマネスク式」の入口は、暦年代を考える上での資料から外しておくべきであると考えられる。

そうであるとする、先にあげた6つの段階のなかで、最も確実な暦年代の手がかりをもっているのは、第5段階のクロンマクノイズ(A)と考えることができる。このラウンドタワーは年代記から1124年の構築が推定されるものである。また、同じ第5段階のカッシュルの例も、1101年から1119年の間に構築されたと考えられている(O'Keeffe 2004: 113)。さらに新しいものとして、年代記には1238年に構築された例があると記されているので、このあたりが下限となるであろう。一方で、上限については、はっきりとした根拠をみつけることができない。年代記には950年にカウンティー・ミースのスレインの「ベル・タワー」がバイキングの焼き打ちにあったと記されているので、ラウンドタワーは10世紀中ごろにはすでに存在していたと考えられることが多い。それに対して、スレインの例は木造の「ベル・タワー」であり、石造のラウンドタワーはさらに新しくなるといわれることもあるが、はっきりとした根拠があるわけではない(Edwards 1990: 128)。そもそも、このスレインのラウンドタワーは現存していない。



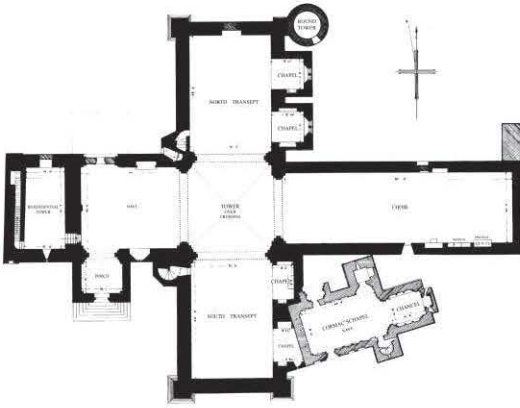


図9 ロックオブカッセルの建物配置

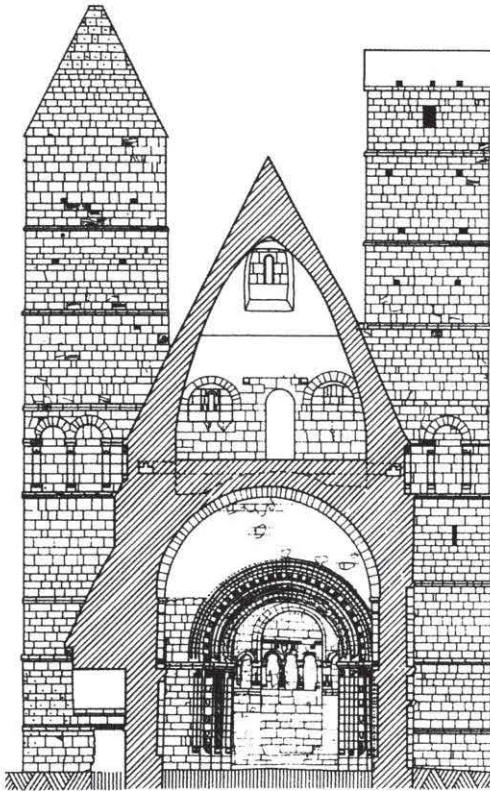


図10 コルマック礼拝堂の断面見通し図

ので、どの段階のものであったかも不明である。また、さきほどもふれたように、第1段階のクロンダーキンは、860年代から1076年までの間のいずれかの時点で構築されたと推定されている。したがって、第1段階のある時点が860年代をさかのぼらないというのが現状で可能な理解ということになると思われる。

なお、エドワーズやオキーフェなどによる近年の研究では、石造の教会建築に関する記述が文献に頻出するようになるのは11世紀以降であることを根拠に、ラウンドタワーの年代を新しくもっていこうとする意図が強く働いているように感じられる。これは、アマチュアの研究者であるバロウらの6世紀ないし7世紀にはラウンドタワーが出現するという主張が強く意識されていると思われる。しかし、ラウンドタワーは、外敵の襲撃から聖典や修道院の宝物を守ることなど、その性格から、一般の教会建築に先行して石造化や切り石化が進んだ可能性も少なくない。クロンマクノイズのラウンドタワーは、同時期のその他の教会建築に比べてはるかに精巧な技術で構築されている。

この時期の教会や修道院の建築において最も重要な基準となるのは、ロックオブカッセルのコルマック礼拝堂である(図9、図10)。岩山のうえに築かれた砦はアイルランドの南西部マンスター地方の中心的な位置にあり、1101年に教会に寄進され、

宗教的中心地として大きな役割を果たすことになった。寄進を受けて後、まもなくラウンドタワーが構築され、1127年から1134年の間に華やかなロマネスク式建築を代表するコルマック礼拝堂が建てられている(Manning, C. *Rock of Cashel*)。礼拝堂は、後の時代に建てられた大聖堂とは方位を異にしており、赤味を帯びた砂岩の切り石を用いて築かれている。コルマック礼拝堂は、アイルランドにおける最初期のロマネスク建築として知られている。オキーフェは、

このコーマック礼拝堂を基準として、1130年以降を「ロマネスク式」のラウンドタワーが建造された時期であるとしている。たしかに、アードモアのラウンドタワー（図1）において、外壁に一定間隔で水平な突出を施した装飾である「ストリング・コース」は、コーマック礼拝堂の影響を受けていると考えることができるかもしれない。しかし、コーマック礼拝堂は著しく精緻な装飾を伴っており、そうした装飾が1130年ごろを境に一気に出現したと考えるのはやや不自然なように思われる。

以上の諸点を考慮に入れ、ここではラウンドタワーの年代について、第1段階を900年前後、第5段階を1100年前後、あるいは1100年代前半とし、それぞれの段階に50年程度を割り振ることを目安としておきたい。ラウンドタワーの建築技術は12世紀前半にその頂点に達し、それ以後も13世紀まで構築が続いたのである。ちなみに、アイルランドがバイキングの襲撃を受けるようになったのは、8世紀末以降のことである。

## 5. 分布と時期

ラウンドタワーの分布は、アイルランド全土におよんでいるが、もう少し細かく見ると、中央部が濃密であり、北東部と南西部がやや希薄であるということがわかる。この分布パターンに近いものをあえて探すとすると、近年のアイルランドの戸別農地保有面積（Allen 2011：28）

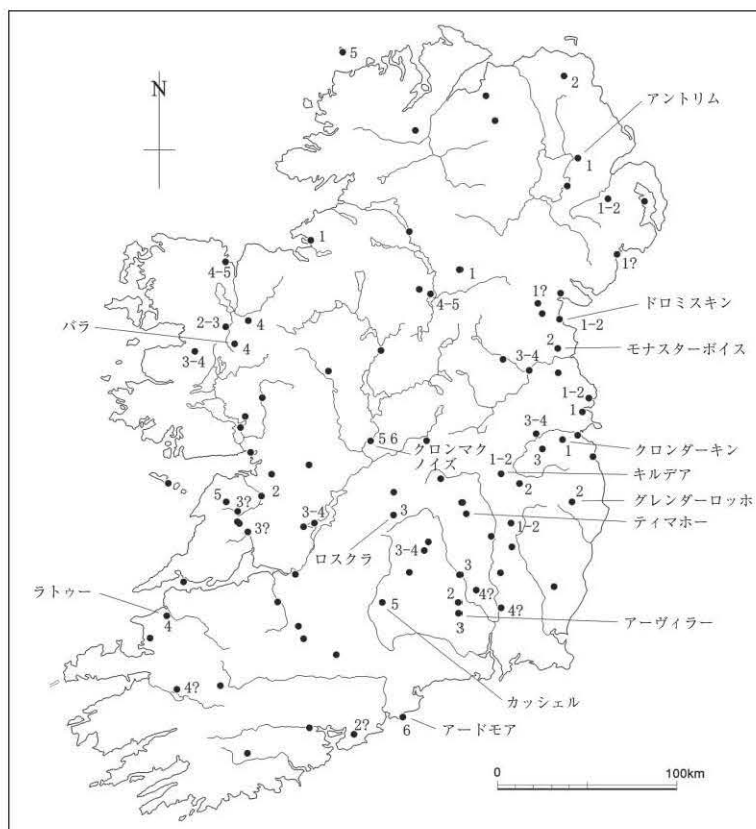


図11 ラウンドタワーの分布と段階



をあげることができるので、やや豊かな土地に多く構築されるという傾向があったのかもしれない。豊かであれば、教会・修道院の富が増し、それを守るラウンドタワーが必要になってくるのであろう。

次に、本稿で用いた編年の基準に従って、分布の時期別傾向を探ってみることにしよう(図11)。先にも述べたように、この編年は段階がそれほど截然と区切られるものではないので、一定の目安程度であると考えたほうがよいかもしれない。また、石積みだけではなく入り口がオリジナルの状態に残っているものは段階の判定が行いやすいが、石積みだけが残存する場合は判定が難しくなる。石積みのみで段階を判定している場合には、図のドットの脇に記した段階の数字の後に「？」を付しており、ひとつの段階に絞り込めない場合は「1-2」というように、ふたつの段階を記している。

このようにして段階の判別ができるものに数字を付してみると、アイルランドの北東半分に1段階や2段階の例が多く、南西半分に3段階以降の例が多いことがわかる。アイルランド北東部では、不揃いな自然石を積んだものが多く、入り口も上部に一枚石(リンテル)をわたすものが多い。こうした傾向については、北東部では古い技法を用いる伝統が遅くまで残っているというように、地域差が一定の影響を与えているという説明も不可能ではない。しかし、1段階の例が多いのはアイルランドの東海岸部の北半分であり、バイキングをはじめとする北からの襲撃・略奪の脅威をいち早く認識した地域からラウンドタワーの構築が始まったと考えるのが、より適切なのではないかと考えられる。

## おわりに

本稿は、アイルランドのラウンドタワーについて、石積み技術の発達と入り口の形態の変化という二つの指標を用い、おおむね独立した二つの指標のそれぞれの変化がほぼ矛盾なく対応することから、これらが時間的な変化を表す可能性が高いということを示したものである。これまで、バローやレイラーをはじめとする多くの方々の努力で、ラウンドタワーの困難な計測が行われてきたが、正確な測量図は作成されておらず、本稿での検討も不十分なところが少なくないことは認めざるをえない。しかし、今後は、レーザーを用いた三次元計測などの実施によって、細部の形態だけでなく、石積みの作業工程なども復元することが可能になるかもしれない。いつの日か、そのようにして作成された実測図にもとづいて、さらに精緻な研究が展開されることを願っている。

本稿は、ダブリン大学(UCD)に滞在した半年間の研究の成果の一部である。受け入れ機関のUCD考古学校のみなさまにはたいへんお世話になった。貴重な助言をいただいたクーニー教授やオサリバン博士をはじめとする多くのみなさまに厚く御礼申し上げます。また、このような機会を与えてくださった岡山大学文学部のみなさまにも感謝の意を表したい。

## 図出典

図2 : Harbison 1970 237頁、図5 : Lalor 1999 61頁、図7 : アントリム・ロスクラ・アーヴィラー・ラトゥー・  
バラ F.J. and K.D.Schorr. 2004～05. Irish Round Towers (<http://www.roundtowers.org/>)、図10・11 :  
Manning, C. *Rock of Cashel*.

## 参考文献

- Allen, F. H. A. 2011. The Making of the Irish Landscape. Aalen, F. H. A., Whelan, K. and Stout, M. (eds). *Atlas of the Irish Rural Landscape*. Cork University Press.
- Barrow, G. L. 1979. *The Round Towers of Ireland: a study and gazetteer*. The Academy Press.
- Edwards, N. 1990. *The Archaeology of Early Medieval Ireland*. Batsford.
- Harbison, P. 1970. *Guide to the National Monuments in the Republic of Ireland*. Gill & MacMillan.
- Lalor, B. 1999. *The Irish Round Tower: Origins and Architecture explored*. Collins.
- McClafferty, G. 2012. *Glendalough: History, Monuments and Legends*. The Columba Press.
- O'Keefe, T. 2004. *Ireland's Round Towers: Buildings, rituals and landscapes of the early Irish Church*. Temps.
- O'Sullivan, A., McCormick, F., Kerr, T. and Harney, L. 2008. *Early Medieval Ireland: Archaeological Excavations 1930-2004*. Early Medieval Archaeology Project (EMAP) Report 2.1
- Petrie, G. 1845. *The Ecclesiastical Architecture of Ireland*.
- Stalley, R. 2000. *Irish Round Towers*. The Irish Treasures Series.

# Irish Round Towers: Development of Stone Masonry and their Chronology

NIIRO, Izumi

Abstract: The chronology of round towers in Ireland has been mainly based on the form of their entrances. Some 'Romanesque'-style entrances have played an especially important role in establishing an absolute chronology. However, their joints with surrounding walls are not so robust, making it possible that such entrances are not originals but remodeled at later periods. To exclude such 'Romanesque' entrances, the development of stone masonry techniques and the change of the form of entrances are sufficiently consistent for constructing the chronology of round towers. With this chronology, a change in the distribution pattern of round towers can be detected from the northern half of eastern coast to the other parts of Ireland, indicating that defenses against Viking attacks and plundering expanded to the whole country.